

## 学校教育におけるグループワークの教育効果に関する研究

-グループワークで必要とされる社会的スキルを中心に-

A Study on Educational Effects of Group Works in School Education

-In The Light of Social Skills in Group Works-

1215112 平石美波

### 【研究目的】

新学習指導要領が平成 30 年度から行われる幼稚園での全面実施を皮切りとして、小学校、中学校、高等学校においても実施される。その新学習指導要領の中では、「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとなっている。そして、「主体的・対話的で深い学び」を実現する一つ的手段である「アクティブ・ラーニング」は大学教育でも重要な考え方であり、受動的な学習から、能動的な学習への転換が求められている。そのような教育を実現していく上で用いられる方法の一つにグループワークがある。それにもかかわらず、グループワークを行う上で要求されるスキルについて、大学生を対象にした研究はほとんどなされていないのが現状である。そこで本研究では、大学生を対象に質問紙調査を行い、グループワークを実施するにあたって学生に要求される社会的スキルが何であるのかを明らかにすることを目的とした。

### 【調査方法】

高知県の 2 つの大学の学生 416 名（男子 289 名、女子 110 名、不明 17 名）を対象に 2018 年 12 月、授業の時間を利用し、現在の社会的スキル、大学の授業におけるグループワークの頻度、グループワークの満足度、グループワークに必要だと思う社会的スキルを測定した。社会的スキルは向社会的スキル尺度、引っ込み思案行動尺度、攻撃行動尺度の下位尺度で構成され、計 25 項目であった。グループワークの頻度は「1. 12～15 回機会があった」、「2. 8～11 回機会があった」、「3. 4～7 回機会があった」、「4. 0～3 回機会があった」の 4 つの選択肢を用意した。グループワークの満足度は「グループワークを通して、理解が深まった」、「グループワークを通して、友だちと仲良くなることができた」など計 8 項目を作成した。

### 【結果・考察】

大学の授業におけるグループワークの頻度を集計すると、半数近くの生徒が「4. 0～3 回機会があった」と回答していた。そこで 1～3 と回答した学生を経験あり群、4 と回答した学生を経験なし群とし、経験あり群においてグループワークの満足度得点から低群と高群の 2 つに分け、2 群の間で現在の社会的スキルの各項目に差があるか検討を行った。その結果、満足度高群において、引っ込み思案行動尺度の中の“友だちに自ら関わっていくことに関するスキル”が低群に比べて高いことが確認された。また、グループワークに必要だと思う社会的スキルの各項目について 1 サンプルの  $t$  検定を行ったところ、全ての項目で有意な差が見られた。これらのことから、回答した大学生は効果的なグループワークには全てのスキルが必要だと考えているが、その中でもグループのメンバーに自ら関わっていくことに関するスキルが、効果的なグループワークを行う上で、最も重要であるということが示唆された。しかし本研究の調査では、経験なし群にグループワークの経験が全くない生徒と、数回ある生徒が混在しており、グループワークの頻度と社会的スキルの関係を明らかにすることはできなかった。また、生徒の半数近くが授業でグループワークをほとんど経験していないという結果は、今後の大学教育の課題であるといえる。